

# 戦後65年を迎えて医学界が 果たすべき課題

山口 研一郎 現代医療を考える会代表、やまぐちクリニック院長

私は、本年8月7日に国際平和シンポジウムが開催される長崎の地において、被爆4年後の1949年に生を受け、その後1970年長崎大学医学部に籍を置いた。当時医学部には、戦時中七三一部隊に象徴される細菌戦部隊に属し、敗戦後研究職や教職に就いた教官が在籍していた。

その当時病理学の教授であった土山秀夫先生(その後長崎大学学長、現在世界平和アピール七人委員会委員、後述する“進める会”顧問)は、1995年8月発行の『メディカル朝日』の“特集—医師と戦争”に、「七三一部隊が医学に問いかけるもの」と題して以下のように記しておられる。

「(1969年秋、戦時中七三一部隊に赴任したA先生の話聞く機会があった。A先生にとって七三一部隊は、『極楽と地獄が同居しているようだった』。人権を踏みじめる実験の数々に耐えられず早期に内地送還を果たした。しかし敗戦まで憲兵の尾行におののき、戦後はGHQの追及を恐れた。(前略)七三一部隊に所属した医師たちのほとんどは、平時であれば大学や研究所で医学に打ち込む熱心な学究の徒であり、社会的にも相応の常識を持ち合わせていたはずの人たちであったろう。それがなぜ部隊に赴任するや、実験対象の人間性を無視して相手を“マルタ”と呼び、平然と微生物、凍傷、真空実験などのおぞましい行為に手を染めるようになったのか。果たして彼らの行為は、戦時中という特殊な環境下にあったのだから仕方なかった、とする“環境悪論”だけで片付け得るものであろうか。私たちは改めてこの点を深く掘り下げて考えない限り、今後再び同じ過ちを繰り返す可能性が皆無だとは言えないと思う。(中略)戦後50年を経た今年、私たちは少なくとも当時の歴史の暗部を直視し直すことだけは、是非しておかなくてはならない。(後略)」

戦後65年を迎えた現在、全国保険医団体連合会を始めとする各医療関係団体によって結成された“戦争と医の倫理”の検証を進める会”は、来春(2011年)開催される4年に1度の日本医学会総会において、戦時中の医学・医療のあり方について検証する「戦争と医学」の展示会・シンポジウムを総会事務局に申し入れている。2008年6月以来2年間にわたる交渉の過程においても、事務局は一貫して拒否の態度を堅持しており、「展示会を行うのであれば、スペース料(数百万円に及ぶ)を支払うこと」という一般企業の展示と同様の扱いとする姿勢を崩していない。

それに対し“進める会”は、戦後の医学界が戦時中の医学について真摯に反省し克服する作業を行わない限り、「いのちと地球の未来をひらく医学・医療」(総会メインテーマ)は実現できないと確信しており、全国の医師の総意として総会において取り上げるべきだと主張している(企業による薬品や医療機器の案内と同列に扱われるべきもの

ではない)。

それは以下のような理由による。第1に、日本の医学界は戦時中七三一部隊に象徴される医学犯罪に手を染めたにもかかわらず、敗戦後米軍(GHQ)との取引によってその存在が隠蔽され、部隊員の多くが断罪されることなく全国の大学や研究所に返り咲いた。その結果、あらゆる研究分野や臨床の場において、「七三一的手法」が存続し、多くの後輩が育て上げられた。

第2に、戦後の医療において数限りないほどの薬害・医療被害が繰り返され、その多くは患者の生命や人権が軽(無)視された結果もたらされた(最近では、奈良・山本病院において肝腫瘍をがんとして偽って摘出し死亡させた事件—本会報、2010年4月発行、3ページ参照)。とりわけ薬害エイズにおいては、七三一部隊元隊員が設立したミドリ十字(当時)のエイズウイルスに汚染された血液製剤が、部隊の元要職者が歴代の所長・副所長を占める国立予防衛生研究所(当時)による許可書(「国家認定証」)によって数千名の血友病患者に対して使用された。その多くがHIV保持者となり、エイズを発症し死亡した人もいた。

第3に、現代の先端医学・生命科学は、人間の尊厳に抵触する危険性をはらんでいる。本年7月より改正施行される「臓器移植法」は、これまで誰にとっても「見える死」であった三兆候死にかわり、「見えない死」とされる脳死を人の死と法的に定め、その判定の権限を医師に一任した。また「法」の審議過程で問題になった「長期脳死」事例(脳死判定後数カ月から数年にわたり生存し続けている主に小児の事例)も臓器摘出の対象になるなど、「安楽死・尊厳死」に道を開く。生殖医療における体外受精による出生前(遺伝子・染色体)診断は、「病気」や「障害」の可能性を持つ遺伝子(胚)はあらかじめ排除するという点で、特にナチスの時代に悲劇をもたらした「優生思想」「優生政策」に結びつく。この間脚光を浴びるES細胞やiPS細胞による再生医療は、人間の身体を「故障したら交換する」「古くなったら取り換える」ことを可能にする。これまで私たちが「かけがえない唯一の生命」として互いに尊重し合ってきた人間観・生命観に対し、根底的に変更を迫ることになりかねない。

今や生命工学は「人工細菌」を作ることにも可能にしており、一歩間違えば生物兵器への悪用も可能となる。従って今日の医学者・科学者には、従来以上の生命や生物に対する冷静で冷徹な態度が必要とされる。そのためには過去の事実に対する徹底した検証が必要なのである。

すでに、聖路加国際病院理事長日野原重明氏(“進める会”顧問)を通じての第28回総会会頭矢崎義雄氏への懇談の申し入れ、日本医師会新会長原中勝征氏への協力の申し入れを行っており、実現をめざし奮闘中である。

(やまぐち・けんいちろう)